

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.47

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

平成18年度支部総会・第1回(通算54回)支部研究例会報告



平成18年5月27日(土)午後1時半より広島県立生涯学習センター視聴覚室(広島市東区)において、今年度支部総会、および第1回(通算54回)の研究例会が開催されました(参加者17名)。

竹中龍範支部長の開会挨拶の後、議長として会員の伊藤弘之先生を選出して支部総会を行いました。まず前年度の会務報告・会計報告・会計監査報告が行なわれ、了承されました。また、論文投稿規程改定の提案が行なわれ、原案通り承認されました(審議内容のまとめは3~4ページをご参照ください)。その後、今年度行事計画が了承され、最後に支部活動の活性化に関する意見交換を行い総会を終了しました。

研究例会では、田村道美先生、風呂鞆先生による研究発表が行なわれ、充実した研究討議が行なわれました。お二人の研究発表の後、田村道美副支部長のご挨拶で閉会、その後懇親会場(広島駅ビル・銀座ライオン)に移動して研究討議が続けられました。

以下、研究発表の概要と感想を掲載します。ご参照ください。

[1] 田村道美(香川大学)

「漱石と Cassell's National Library (2) —A. Pope, *Poems: 1700-1714*の書き込みを中心に—」

(司会 竹中龍範)

(概要) 漱石が蔵書の余白に記した書き込みを収録した『漱石全集』(岩波書店)の最新版第27巻(1997年)と旧版第16巻(1967年)とを比較すると、驚くことに、前者から半数以上の書き込みが削除されている。最新版の編集方針がいかに暴挙かつ漱石への冒瀆であるかを、カッセル国民文庫版 A. Pope の *Poems* 収録の “The Rape of the Lock” の削除された書き込みを解明することによって明らかにした。

(田村道美)



◆実証的な分析によって漱石の書き込みが意味するところを解明された御発表で、感激しました。書き込みの意味が不明だから削除するというのでは、漱石の英文学受容・理解を跡づけようという姿勢が編集部には欠けていると言わざるを得ないと思いました。(Dragon)

◆比較文学の手法を巧みに用いて考察された、誠に興味深いご発表に啓発された。発表内容は、4期に亘って出版された Cassell's National Library を調査し、夏目漱石が用いた版を突き止め、更に最新版『漱石全集』から削除された余白の書き込み6箇所を逐一解明するものであった。この手法は、発表者が最も得意とする論証の手法と理解した。まるでミステリーの謎が名探偵の口から次々と解き明かされるのを聞くが如き快感を覚えた。(風呂)

◆1人の作家を知るのに、その作品だけでなく、小さな書き込みも貴重な手がかりになる。ていねいに1つ1つ調査されたご研究はとても勉強になりました。ありがとうございました。(瀬戸)

◆緻密な考証により漱石の書き込みの実態を明らかにされた先生のご研究は大変刺激的であり、ご研究の手法から多くを学ぶことができました。英学史研究の方法論として、大変重要であると思います。

私は古い教科書などを調べていますが、使用者・読者による「書き込み」から見えてくるものはたくさんあると思います。先生のご研究を参考にさせていただき、調査を進めてみたいと思っています。

(Horse)

[2] 風呂 鞏 (比治山大学)

「Literary Assistant としての大谷正信」

(司会 田村一郎)

(概要) 今回の発表は、“俳人としての大谷繞石”ではなく、大谷を“Literary Assistant”にさせた要因の考察を初め、大谷のハーンへの資料提供および第一書房『小泉八雲全集』翻訳への情熱と苦心を追うものである。

東大時代、ハーンのために資料収集をすることで、学費の援助を受けた大谷正信(1875-1933)は、大正13年、旧制広島高等学校の新設と共に金沢より移り、10年間勤めた。その間のことは著書『己がこと人のこと』に詳しい。また、広島城西・中央公園「広高の森」には、彼の遺徳を顕彰する句碑「枝下ろされし 濠端の樹も 東風そめし」が建立されている。

残念ながら恩師ハーンの伝記を書くことが出来なかった大谷は、広高の教授時代、『小泉八雲全集』

18巻の翻訳に全身全霊を捧げ、全10,800頁中、3分の1に相当する3,200頁を訳した。これによって、大谷はハーンの恩義に報いることができた、と安堵したのではあるまいか。

大谷の提供した資料は相当な分量に達するが、それらをハーン作品と比較研究することで、ハーンが大谷の素材をもとに芸術的香りの高い作品への昇華させた、その創作の秘密にも迫ることが出来よう。

(風呂 鞏)



◆大谷繞石について幅広い分野から資料を集められたの御発表で、特に繞石とL.ハーンとの関係がよく分かりました。Literary Assistantとしての彼の動きがどのようなものであったかに興味を惹かれました。(Dragon)

◆風呂先生の話し振りが面白く、大谷正信の優秀さ(多くの翻訳がある等)と人間臭さ(自己主張の強さ)がよく伝わってきた。緻密な調査研究で内容が濃かったが、エピソードを交えてなごやかな語り口で、わかりやすい発表であった。(保坂)

◆ハーンのアシスタントをして経済的に援助を受けたことに恩を感じ、ハーンをととても尊敬していた大谷正信。少し調子に乗ってしまう性格から、周りに煙たい存在と思われるでも、どこか憎めない人柄であったのだろうということが、先生のご発表から感じられました。

また、ハーンの日本に関する詳しい記述の裏には、大谷正信のようなアシスタントの努力もあったことも分かりました。

風呂先生の集めたハーンに関する資料のすばらしさと、ハーンへの情熱を改めて感じたご発表でした。ありがとうございました。(瀬戸)

◆大谷正信とハーンとの関係について、様々なエピソードを交えて詳しくご紹介くださり有難うございました。配布資料の中に、大谷が教鞭を取った広島高等学校の講堂の写真や、当時彼が丹那に住んでいたとの記述を見つけ、改めて私自身と英学との接点に不思議な縁を感じます。(Horse)

[例会全般に関して]

◆発表に先立つ総会で、司会の伊藤先生のコメントにあったが、何とかしてもっと多くの参加者を得たいものだと思われた。昨今の大学のあり方にも関係ない訳ではないだろうが、こうした貴重な発表は聴講する人を増やす方策を講じたい。そうでないと、新しい名簿には約 60 名近くの会員が載っているのに、組織を中国・四国と上げた意味が薄れる。

ところで、伊藤弘之先生には C・ディケンズの『アメリカ旅行(上・下)』(岩波文庫)の本邦初訳を出された。『英語青年』6月号誌上にも、その翻訳のご苦労と翻訳作業中気付かれたディケンズの面白い表現を 2 つ挙げて投稿しておられる。そうした苦労話を伊藤先生から直接御伺いしたい。次回の講演に是非と事務局から依頼されてはいかがであろうか。(風呂)

◆少人数ながらも立派な研究発表と活発な質疑応答があり充実した学会と存じました。それだけにもっと出席者が多ければ、発表する方々も更に張り合いがあったと思います。

◆総会でも指摘があったように、例会参加者をいかに増やすかが課題かと思えます。(Dragon)

中国・四国支部ニュース

◆平成 18 年度第 1 回役員会

総会に先立ち、正午より役員会を開催しました(出席者 9 名)。前年度会務報告・会計報告・会計監査報告、および今年度行事計画の審議の後、論文投稿規程改定の原案作成を行いました。

◆支部総会 審議のまとめ

①平成 17 年度会務報告

当日配布された『英学史論叢』第 9 号(通巻 29 号)記載の内容に基づき、事務局より平成 17 年度の会務報告が行なわれました。

②平成 17 年度会計報告・会計監査報告

収入	繰越金	-15,181
	預金利子	1
	寄付金(1件)	15,000
	補助金	13,000
	年会費(41口+学生1口)	125,000
	収入合計	137,820

支出	通信費	33,900
	印刷費	81,690
	会議費	10,000
	講師謝礼	10,000
	雑費	4,351
	支出合計	139,941

次年度繰越金 -2,121 円

以上ご報告申し上げます。

平成 18 年 4 月 30 日 事務局会計担当 松岡博信◎

本学会の会計を、収入ならびに支出に関して、それぞれ関係書類および領収書などにより監査いたしました。その結果、すべて適正、正確に会計処理ができていたことを確認いたしました。以上報告いたします。

平成 18 年 5 月 25 日 会計監査 山本勇三◎

鉄森令子◎

③論文投稿規程の改定

次の通り「執筆要領」及び「標準書式」の改定が承認されました。下線部が今回変更された箇所です。

『英学史論叢』執筆要領

- ・『英学史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいったものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副 3 通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10 ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は 1 編につき 3,000 円とする。ページ数を超過した場合は、1 ページにつき 1,000 円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として 2 ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。

④今年度の行事計画

1) 研究例会

第1回 平成18年5月27日(土) (予定通り終了)

- ・広島市・広島県立生涯学習センター
- ・例会当日、役員会および支部総会を開催

第2回 平成18年12月2日(土)

- ・高松市・香川大学での開催予定
- ・例会当日、役員会を開催する。

2) 支部研究紀要

『英學史論叢』第9号を発行(予定通り発行・配布済)

3) ニューズレター

例年通り、以下の予定で発行する。

- ・No.46(平成18年4月)・No.47(平成18年7月)
- ・No.48(平成18年10月)・No.49(平成19年1月)

⑤その他

- ・支部例会参加者増に努める必要がある。
- ・例会開催時期を検討すべきではないか。
- ・ニューズレター、研究紀要への、より積極的な投稿と掲載が必要。
- ・以上の意見を踏まえ、役員会、および事務局で継続的に検討を重ねる。

事務局よりお知らせとお願い

◆今年度の研究紀要『英學史論叢』第9号、および会員名簿を皆様にお届けいたしました。お気づきの点がございましたら、事務局までお知らせください。

◆新入会員(敬称略)

佐藤俊之(広島県)

◆会費の納入について

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費(一般3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願ひします。

(口座番号) 01360-9-43877

(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

◆今年度第2回研究例会(12月2日(土)高松市・香川大学で開催予定)の発表者を募集します。研究発表(口頭発表30分・質疑応答20分・計50分)をご希望の方は、9月末までに事務局へご連絡ください。

◆日本英学史学会第43回全国大会は2006年10月21日(土)~22日(日)、東京都台東区民会館で開催されます。

10月21日(土)12時30分受付、特別講演、総会、懇親会

10月22日(日)研究発表(午前・午後)

広島英学史の周辺(13)

▼今月は英語教育史の学会や大学の公開講座でお話しする機会がありました。地域の学校史、地元の執筆者による英語教材のことなど、調べれば調べるほど面白さが増していきます。その過程で改めて気づいたのは、わが支部の先生方が蓄積されたご研究のなんと豊かなことか。▼寺田芳徳先生のご著書やお話から、庄原英学校を理解するには地域や時代の抱える背景から幅広い視野で捉えなくてはならないことを強く感じました。▼ナショナルの「独案内」(特に、庄原出身の森修一・訳著)の役割をよりよく理解する上で、松村幹男先生よりお送り頂いた『解説・明治時代の中学生英語学習帳』(私家版、西日本文化出版、2006)は大きなヒントを与えてくれました。▼積み重ねの大切さをいつも教えてくださる風呂鞆先生。主宰される「ハーンの会」は70回を超え、八雲会の『へるん』43号(2006)にも貴重なご論考の数々を発表されています。▼長い梅雨の後は猛暑の予感。どうかご自愛ください。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 47

2006年7月28日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ: http://tom.edisc.jp/eigaku/

